1990 年代のミヒャエル・ボレマンスの活動について

実践女子大学　石川 絵梨花

ミヒャエル・ボレマンス（Michaël Borremans、 1963～ ）は、ベルギーのゲントを拠点に活動する現代アーティストであり、その不穏な雰囲気や不条理な表現で知られている。2000 年以降ゲント現代美術館やダラス美術館などで個展を開催するとともに、2004 年のマニフェスタ 5 や 2006 年のベルリン・ビエンナーレなどにも参加している。日本では 2008 年開催の個展「Michaël Borremans : Earthlight Room」（ギャラリー小柳）以降、個展「アドバンテージ展」（原美術館、2014）、「Michaël Borremans | Mark Manders : Double Silence」（金沢 21 世紀美術館、2020～2021）が開催された。

ボレマンスに関する先行研究は少なく、展覧会図録が主な先行研究と言え、現在約 20 冊の個展図録が出版されている。そのうち、ボレマンスの 3 つの個展企画に携わったジェフリー・グローヴ（Jeffrey Grove）はボレマンス研究において重要なキュレーターの 1 人と言える。彼は 2015 年に行われたボレマンスの大回顧展「Michaël Borremans : As sweet as it gets」に Seninor Curator of Special Projects & Research として担当した。彼はボレマンスの作品について、ゴヤやベラスケスの影響を受けていることや、マネの描き方との類似性を指摘している。

先行研究では、ボレマンスが国際的に活躍しはじめた以降の作品を中心に扱っており、初期活動について言及されているものはない。本発表では、1990 年代におけるボレマンスの活動と、彼が拠点とするゲントで展開された現代美術の動向を概観する。その手がかりとして、1990 年に創立されたオルタナティブ・スペース、クロックスハポックスに注目する。ボレマンスは 1991 年から 2013 年の間クロックスハポックスのメンバーとして活動していた。2 回の個展を開催し、グループ展やイベントにも複数参加している。クロックスハポックスは多くのプロジェクトを展開しており、美術館の機能を街に持ち込む展示形式を積極的に用いている。

ゲントは、1992 年の「ドクメンタ 9」のディレクターを務めたヤン・フートが活動していた都市であり、フートによる企画展やプロジェクトの影響力を無視することはできない。またボレマンスが国際的に活躍するようになった要因として、フートの存在は大きいと言える。以上のことからクロックスハポックスでの活動を追うとともに、フートとの関係に着目することで、初期の活動が現在のボレマンスの画業にどのように影響しているか調査・考察を行うことによって新たな視座を提示したい。